

明治期チベット・モンゴル出身「留学生」の特異性 について

石濱, 裕美子

<https://doi.org/10.15017/4794464>

出版情報 : 九州大学東洋史論集. 49, pp.1-30, 2022-03-28. The Association of Oriental History,
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

明治期チベット・モンゴル出身 「留学生」の特異性について

石 濱 裕美子

はじめに

1. 日清戦争後に開始したチベット・モンゴル工作
 - (a) 外務大臣大隈重信の大陸への働きかけ
 - (b) 満洲・モンゴル王公と日本人との交誼の始まり
 - (c) 満洲皇族・モンゴル王公の極秘来日
2. 日露戦争下における大陸への女性教習派遣
 - (a) 下田歌子によるハラチンへの河原操子の派遣
 - (b) 下田歌子による肅親王家への木村芳子の派遣
 - (c) 大隈・下田が協調してのハラチン・モンゴルからの「留学生」受け入れ
3. チベット-モンゴルを同一視野に入れた懐柔策の始まり
 - (a) ダライラマのモンゴル滞在が引き起こしたチベット仏教世界の活発化
 - (b) 大隈・下田によって送り出されたチベット・モンゴルへの通信員たち
 - (c) ハラチンからの極秘留学生
4. 参謀本部が遂行したチベット「留学生」招致計画
 - (a) ダライラマの寺本に対する無関心
 - (b) ダライラマ書簡にみる日本仏教の軽視
 - (c) 寺本を支援したハラチン人側近
 - (d) チベット「留学生」招致に関する日本側の考え
5. 辛亥革命後のチベット・モンゴル「留学生」の行動
おわりに

はじめに

19世紀末、欧米発の仏教ブームの中でチベットの都ラサは、世界中の探検家の目標となっていた。日本においても1890年代後半から河口慧海(1866-1945)、能海寛(1868-1903)、寺本婉雅(1872-1940)の三人の僧

侶たちが宗教的な動機から、また、成田安輝（1864–1915）は外務省の情報収集の任務を帯びて、大陸に渡りラサに潜入する機会をうかがっていた。1901（明治34）年5月、河口慧海が世界に先駆けてラサ潜入に成功し、続いて12月に成田安輝もラサに入った。河口、成田はいずれも英領インドから北上しての極秘のラサ入りであり、世界的に加熱していた探検家たちのラサ到達レースに先んじたという意味はあるものの出自を隠しての潜入であったため、チベットの上層人士に日本、あるいは日本人を印象づけることはなかった。

1904年7月、ヤングハズバンド大尉率いる英領インドのイギリス軍がラサに侵攻すると、ダライラマ13世（1876–1933）はラサを脱出し、ロシアの支援を求めて北上した。以後ダライラマはモンゴルのイフ・フレー（現ウラーン・バートル）、青海のクンブム大僧院（漢名：塔爾寺）、五台山、北京、再びクンブム大僧院を訪れ、その後、ラサに短期間帰還した後、四川軍の侵攻を受けて英領インドに亡命するなど1913年1月にラサに完全帰還するまでの間、8年にわたり移動の日々を過ごすことになる。

このダライラマの大移動はロシア領内のブリヤート人、内外モンゴル人、青海・新疆のモンゴル人たちにダライラマを身近に礼拝する機会をもたらし、ロシアや清によって隔てられていたチベット仏教徒たちに信仰を紐帯とした連帯感を生み出すに至った（石濱 2019a）。1905年に日本人として三番目にラサに入った寺本婉雅は、この時期に青海地域で満蒙蔵諸地域のチベット仏教徒が往来し、行政区分を超えて相互の連絡関係を強めていた様子を目撃している（和田 2021: 8–9, 28–35）。

一方、清朝も遅まきながら近代化をはかる新政をうちだすと、それはチベットとモンゴルの実効支配を伴うものであったため、両地域は猛反発しロシアとの距離を縮め清から離れる動きを加速させた。このようなチベット・モンゴルの動きは、大陸における権益をロシアと争う日本にとっては目を離せないものとなった。参謀本部の福島安正（1852–1919）等は、チベット・モンゴル地域の王公・高僧を日本観光・視察に誘い、有力者の子女を日本に留学させることによってこれらの地域と関係を構築しようとした。

チベット・モンゴルからの「留学生」あるいはそこへ送られた日本人通信員や日本人教習は、これまで清国留学生史あるいは日本の大陸政策史の枠の中で論じられてきた⁽¹⁾。しかし、チベット・モンゴルは元来清朝の実効支配下になく、清末には清の羈絆を脱し近代的な「国」としての承認を

求め始めていた。そのため、チベット・モンゴルからの「留学生」も一般の清国留学生問題とは異なる視点から見る必要がある。

本稿ではチベット・モンゴル地域からの視察員・留学生を選定し、受け入れた人脈が共通していること、招聘目的に政治性が強いこと、来日した人々は学生というよりは賓客としてもてなされていたこと、参謀本部や外務省などの日本視点ばかりではなく、チベット・モンゴル側の視点も加えて、これらの地域からきた留学生の特異性について明らかにするものである。

1. 日清戦争後に開始したチベット・モンゴル工作

(a) 外務大臣大隈重信の大陸への働きかけ

日本政府のチベットへの働きかけは、1897（明治30）年12月22日に外務省の上層部が極秘に開始した成田安輝の入蔵計画によって始まった。後年成田安輝が外務大臣加藤高明に語ったところによると成田の入蔵は「大隈〔重信〕、樺山〔資典〕、西〔徳二郎〕、小村〔寿太郎〕、福島〔安正〕諸君の賛成を得て」いたという⁽²⁾（以下引用文中のカタカナ書きは平仮名に改めた。また引用文中の下線、補語、同義語の表示は筆者によるものである。）。大隈重信（1838-1922）はこの計画発足時の外務大臣であり、西は決済時の外務大臣であり、樺山は成田が殖産技師として台湾調査を行っていた際の初代台湾総督、小村寿太郎は日清戦争当時北京公使館にあってジャーナリスト島川毅三郎（1868-1908）にロシアの調査を命じた人物であり、計画発足時は外務次官であった。大隈は東京地学協会の発足時（1879年）からの会員であり、後に述べるように1910年に寺本婉雅のチベット旅行記、鳥居龍蔵（1870-1953）のモンゴル旅行記に序をよせ、また白瀬麤の南極探検隊後援会長になるなど、探検家の後援においても名高い（石濱 2019: 240-241）。そのため、成田の入蔵計画には世界的なブームになっていたラサ探検に日本から参加するという意識もあったと思われる。1897年6月、外務大臣大隈によって駐清特命全権公使として北京に派遣された腹心の矢野龍溪は、翌1898年5月7日、総理衙門（外務省にあたる）に対し全額日本側が費用を負担する「留日学生派遣の提案」を行った。この提案自体は資金難や戊戌の政変など諸般の事情により実現しなかったが（川崎 2006）、浙江省など地方からの軍事教育目的の日本留学はすでに始まっており、光緒新政によっても留学は推進されたため、以後清国からの留学生は漸次増

加していく。

1899年9月19日、はじめての清国留学生在東京専門学校（現早稲田大学）の門を叩き（『早稲田大学百年史』第1巻3篇14章）、下田歌子（1854-1936）が同1899年に創設した実践女学校も1901年に最初の清国女子学生を受け入れた（『下田歌子先生伝』: 393-394）。チベットへの通信員派遣と清政府に対する留学生受け入れ提案が、大隈重信の外務大臣在任中に始まっていたことは銘記しておきたい。

（b）満洲・モンゴル王公と日本人との交誼の始まり

成田や能海と同時期にラサ入りをめざしていた東本願寺の僧寺本婉雅は、1898年に大陸にわたった当初から支那通と呼ばれる大陸事情に詳しい軍人や通信員コミュニティと関係を有しており、1900年4月、日本に一時帰国すると、5月31日に海軍少佐小笠原長生を訪問し、同日小笠原の紹介で参謀本部の福島安正少将を訪い、6月1日にはその福島を紹介で外務省政務局長内田康哉を紹介された。寺本は、本土においても参謀本部・外務省との繋がりを得たのである（和田2019b: 220-222, 高本・三宅 2013: 148）。寺本は8月19日に義和団事件の対応に大陸に派遣された第五師団の通訳として再度北京に入り、チベット文大蔵経を入手し、疲弊する雍和宮（北京最大のチベット僧院）の僧たちの救援などにあたった（和田 2019b: 217-220）。

義和団に包囲されていた北京の日本公使館内には駐清公使の西徳二郎、チベット入りをめざしていた西本願寺の川上貞信、東京帝国大学助教の中国学者服部宇之吉（妻繁子が下田歌子の門下生）がいた。福島安正は司令官として北京の公使館を解放し、通訳として北京に伴ってきた同郷の川島浪速（1866-1949）に北京の治安回復を行わせた。日本が北京の治安を預かっていたこの間、福島安正と川島浪速は清朝皇族の肅親王善耆（1866-1922）と、グンサンノルブ郡王（1872-1931: 貢桑諾爾布/貢王）と交誼を結んだことはよく知られている。ハラチン部（喀爾沁/喀喇沁）は内モンゴルの中でも北京のある直隸省に北接するため、早くより農地化が進み、同王の妃は肅親王の妹であるため清皇室との関係が深いという特徴があった。

つまり、後に満洲人皇族・モンゴル人王公との交遊で知られる日本人脈（福島安正・川島浪速・寺本婉雅・服部宇之吉）と満洲人・モンゴル人王公（肅親王・グンサンノルブ郡王）の関係は、義和団事件を契機に始まっ

たのである。

(c) 満洲皇族・モンゴル王公の極秘来日

1903(明治36)年、3月1日から7月にかけて、モンゴル・満洲王公の子弟(ハラチン部のグンサンノルブ、肅親王の諸子、サインノヤン部のナヤント親王の子)が極秘来日した。この来日には参謀本部次長の福島安正が関与し川島浪速が同行しており、一行は日本各地を視察し大隈重信などに歓待された。この来日は同王の友人である陸軍少将中村愛三と北京公使館付武官山根武亮が日本政府に提出したもので(横田 2003: 28-29)、横田(2005: 92-93)によると日本主導で行われ、日本の外交部、軍部、政界、財界を巻き込んでの一大事業であった。

また、同年6月、寺本婉雅の勧めで雍和宮の貫首アキャ・フトクト(阿嘉胡凶克凶)が来日し東本願寺、大隈邸などを訪問し、宮中に伺候するなどの歓待を受けている(高本 2010: 85-95)。日露戦争直前の、ロシアの脅威が最大限に高まっていたこの時期、対ロシア最前線のモンゴル王公や清の皇族を来日させ歓待した目的は、彼等の目をロシアから日本に向かせることにあった。

2. 日露戦争下における大陸への女性教習派遣

(a) 下田歌子によるハラチンへの河原操子の派遣

グンサンノルブは来日前年の1902年にすでにハラチン王府に近代教育を行う崇正学堂を開設していたが、日本視察によって軍備の近代化の必要性を痛感し、1903年夏には士官養成のための守正学堂を、12月には下田歌子の意見を容れて女子教育を行う毓正女学堂を設立した。これらの学堂にはいずれも福島安正が関与して日本人教習が就任し、毓正女学堂の教習には実践女学校の校長下田歌子の仲介により福島安正・川島浪速の同郷人河原操子(1875-1945)が派遣された(横田 2005: 95-96)。

河原操子は下田歌子の仲介で1902年初の女性教習として上海の務本女学堂に赴任していたが、そこからのハラチン・モンゴルへの転任であった。河原は日露戦争前夜の1903年12月12日に対ロシアの前線にあるハラチン・モンゴルに北京から旅立った。河原がモンゴルの子女の教育に加えて、日露戦争下においてシベリア鉄道爆破の命を受けていた特殊任務班を支援し、

ロシア情報を流す任務に従事したことはよく知られている（『婦人界35年』: 552-554, 1093）。1909年に河原がモンゴルから帰国して上梓した自伝『蒙古土産』に下田歌子がよせた序に「[本書の内容は] 戦時の事は大半公事の秘密に関するが為めに、すべて削除せざるを得ず、故に文はただ皮を余して肉と骨を除却せしが如き」とあり（一宮 1909: 序文部）、下田が河原のハラチンでの仕事について女子教育（皮）よりも戦時の極秘任務（肉と骨）を重く認識していたことが分かる。

1904年2月、日露戦争が開戦すると、成田安輝は青木宣純の下でイフ・フレーでの現地工作にあたった（谷 1966: 292-293）。チベット工作に当たっていた成田がモンゴルに配属されたのはチベット仏教徒であるモンゴル人に対してチベットでの経験を活用することが期待されていたからであろう。

（b）下田歌子による肅親王家への木村芳子の派遣

一方日本本土においては、日露戦争最中の1904年6月、下田歌子が中心となって中国の女子教育を支援する東洋婦人会が設立された⁽³⁾。同年冬、川島浪速から「時期が熟して[肅]親王家の邸内に和育女学校を新設するにつき、誰か適当な教師を派遣して欲しい」との依頼状が下田の下に届いた（『下田歌子先生伝』: 422）。これに応じて翌年5月、下田は実践女学校の教諭木村芳子（1874-1910）を肅親王家の家庭教師として派遣した。

この時白羽の矢が立った木村芳子は鹿児島県の士族で島津公爵家家扶財務部長であった木村時習の娘である。以下に見るように河原操子が肅親王に対して木村の人物保証を行っているが、注目すべきは木村の人物保証の根拠を肅親王も河原も下田歌子の門弟であることに置いていることである。

…過日王妃を経て[肅]親王並に同王妃に「木村さんは確實なる人物故総てについて御安心なさるやう尚又当人自身の考に及ばざる事は下田先生に御相談して御助け申上げませうから何卒何なりと御腹臆なう御申聞け下さるやう」と申上候ひし処御両方様とも大層御悦び遊ばされ「木村さんの御立派なる方なることは私共は下田先生の御門弟なる点を以て十分に信じて居ります…

（1905（明治38）年5月22日付河原操子下田歌子宛書簡⁽⁴⁾）

木村芳子は王府の中に皇族の子女の教育を行う和育女学堂を設立し、翌

1906年1月、成田安輝と北京で結婚した⁽⁵⁾。翌1907年1月、日露戦争後に大陸で活動していた石光真清が、奉天と安東県の間にある草河口駅で偶然成田安輝と遭遇している。その際、成田は支那服を身につけ、石光(2018: 168-170)によると「満洲を放浪し、蒙古、西藏まで潜入して特別任務に就いていたそうである」とのことから⁽⁶⁾、結婚後も成田は特別任務を続けていたと思われる⁽⁷⁾。木村芳子は1909年に成田との間に一子安清をもうけたものの、1910年3月に肋膜炎で早逝した⁽⁸⁾。

(c) 大隈・下田が協調してのハラチン・モンゴルからの「留学生」受け入れ

1906年2月、毓正女学堂で教育を受けた三人のハラチン・モンゴルの女子留学生が河原操子に伴われて来日し、実践女学校へ入学した(『婦人界三十五年』: 552-554, 横田2009: 158-161)。4月、トルグート(トルハタ)のバルタ郡王が来日し、福島安正が清国人士官を速成するために創設した振武学校に入学した(横田: 2006, 2009: 161-166)。トルグートとは中央アジア(新疆)に領地をもつオイラト・モンゴル人の一集団であり、バルタは北京に駐留する王公であった。バルタやハラチン・モンゴルからの「留学生」の詳細については横田素子氏の一連の研究があるため、詳細はそちらに譲ることとして(横田 2003, 2005, 2006, 2009, 赤坂 2019)、ここでは三人のモンゴル人女学生は清国人とは別に日本人の中で教育を受けていたこと(横田 2009: 160)、また以下にみるように、バルタの来日に川島浪速の妹婿が関わっていたことを指摘しておきたい。

バルタを北京から日本へエスコートしたのは川島浪速の妹婿、佐々木安五郎(佐々木照山)であった。来城(1906)によると、北京時代のバルタの身持ちは悪く、「肅親王を始め、照山の義兄川島浪速君なども色を厲して忠告した」が、佐々木照山は「王の遊びは心配するには及ばぬ」と手を携えてともに豪遊していた。しかし、一端日本遊学が決まるとバルタは豹変し一切の遊びをやめたという。来日後のバルタは早稲田から近距離の「大久保の閑村」(西大久保)に居を構え(横田 2009: 165)、大隈重信の屋敷でバルタと謁見したジャーナリストの石川半山は、バルタは大隈の監督下にあったと記している(石川1916: 105)。

つまり、トルグートとハラチンからのモンゴル人「留学生」たちは、いずれも北京周辺においては肅親王・川島浪速、日本にきた後は早稲田の大

隈重信・実践の下田歌子の監督下に置かれていたのである。

明治期チベット・モンゴル出身「留学生」の特異性について（石濱）

3. チベット-モンゴルを同一視野に入れた懐柔策の始まり

(a) ダライラマのモンゴル滞在が引き起こしたチベット仏教世界の活発化

1904年7月、チベットは前述したように大変動の時代を迎えていた。ヤングハズバンド大尉率いる英領インドのイギリス軍がラサに侵攻し、ダライラマはラサを脱出しロシアの支援を求めて北上を始めた。この時ラサ入りを伺って東北チベット（amdo）に潜入していた寺本婉雅は、1904年9月4日、モンゴルに向かう途上のダライラマ一行と偶然遭遇し、その情報をいち早く北京公使館へ送った⁽⁹⁾。寺本はダライラマを足止めさせるべく、青海最大のチベット僧院クンプムに戻って僧侶たちを扇動したが、ダライラマの行く手を遮れるチベット仏教徒はいなかった（和田2021: 28-35）。

翌1905年3月、寺本がラサに向かう途上にあつた時期、川島浪速及び島川毅三郎が北京に滞在するダライラマの使節と2度にわたって会談しており（小林 2019）、参謀本部の満洲・モンゴル担当人材がチベット方面の工作も同時に行っていたことが分かる。寺本は同年5月に青海から南下してダライラマ不在のラサ入りに成功した。寺本はラサに潜入するために「アキャフトクトの弟子で」、「内モンゴルのハラチン王旗下のトメット地方のモンゴル人ラマだ」と仮称していたが（『藏蒙旅日記』: 179）、寺本が数あるモンゴル集団の中からハラチンを偽装の出自に選んだことは、ハラチン王グンサンノルブの何らかのサポートを得ていた可能性を示唆している。同年末、チベットから帰国した寺本婉雅は11月27日に参謀本部にチベット旅行の報告書を提出した。この報告書の中で寺本は

…西藏達頼は単に西藏一国の君主にあらずして、蒙古に於ける精神的統一の法王たるへき奇なる現象を表はすものというへし、蒙古七百万の精神的帰着は一に西藏達頼の双肩にあり…

（和田 2021: 16）

とダライラマがチベットばかりかモンゴル人の精神的な核であること、ま

た、清朝がすでにチベット仏教の施主としての役割を果たせなくなっていることから、ダライラマは「自衛の策を講じ、併せて清帝の羈絆を脱して、自ら統一の大任に当らむことを決せり、」と清朝との関係を断ち切ろうとしていることなどを報告した。つまりダライラマの動静はモンゴル情勢にも影響するため、ロシアを頼るダライラマを懐柔することは日本にとって急務となったのである。

1906年2月、寺本は大隈邸を訪問しチベット地図を献上し、チベット旅行記出版の相談を行った。本旅行記は出版社も決まり大隈は序文まで記していたが、おそらくは寺本がダライラマ13世に対する直接工作に従事したために日の目をみることはなかった(和田 2019b: 207-210)。現行の寺本の旅日記は寺本の弟子横地祥原の編集を経たもので、1906年原版とは異なるものである。しかし、原版のために大隈がよせた以下の序文から1906年版の旅行記の内容を窺い知ることができる。

…今や蒙古民族は分裂し、昔日の如き勇敢なる性質を存せず、又政治上何等の力なしと雖も只西藏の政教一致的關係に依て彼等が唯一の性命となし 喇嘛教上の信念思想に依て僅かに其命脈を保ちて統合せられつあり。喇嘛教の勢力版図は西藏 蒙古、満洲より露領及英領の各地に拡かり支那の実権の殆ど有名無実なるにも拘はらず只宗教上の勢力に依て無為的に統一せられつゝあり…

(和田 2019b: 209)

つまり、本旅行記は同時期に提出された参謀本部報告と同じく、モンゴル、満洲、ロシア・イギリス領のチベット仏教徒たちが、信仰によって自然に(無為的に)統合されつつある様が記されていたことが推察される。この情報を受け参謀本部は寺本婉雅を利用したダライラマ懐柔策に乗り出す。

(b) 大隈・下田によって送り出されたチベット・モンゴルへの通信員たち

寺本が大隈を訪問した翌月(3月)5日、鳥居きみ子が河原操子の後任としてハラチン王府にむかって旅立った。見送りには河原操子が駆けつけ、涙ながらに車中のきみ子の手を取り、「こは下田先生より君が長き車中の徒然にとて美しき器に盛られたる者やをら取り出で給ひつゝ、」と下田歌子の

送別の品を手渡している（鳥居 1906: 1）。鳥居きみ子の夫龍蔵は日本人の起源を探る人類学者であり、帝国大学助手時代の1896年に台湾の人類学研究調査を行っている。この際鳥居は、台湾総督府の技官として殖産調査に携わっていた成田安輝の一行に「御客分として加」わっていた（『徳島日日新聞』明治29年9月4日）。成田の台湾報告書は実質鳥居龍蔵がまとめたものであり（足立 2021）、成田安輝と鳥居龍蔵は旧知の仲であった。

その翌月、1906年、児玉源太郎、福島安正、小村寿太郎、大隈重信の支援を受けて、寺本婉雅が大陸にむけて出発した。寺本はダライラマに直接工作をかけてチベットの高僧に日本視察を促す任務を帯びており（澤田 2018: 268-269）、これはアキヤ・フトクト、グンサンノルブ、パルタなどの満蒙王公の場合と同じく、チベット仏教界の最高権威者であるダライラマ、或いはその側近を日本に迎え、ロシアに向いているチベットの目を日本に向かせる計画であったことは疑いない。

寺本が大陸に向けて出発した翌月、きみ子の夫鳥居龍蔵が人類学調査のために大陸に向けて出発した。龍蔵は帰国後外務省に、明治40年7月10日付でハラチンの状況全般を記した報告書を提出している。そこには「清国蒙古喀爾沁附近の調査を囑託せられ候」とあるため、外務省のための情報収集も任務のうちに含まれていたことが分かる⁽¹⁰⁾。

鳥居きみ子の出発を下田が祝福したように、夫の龍蔵の出発の際には大隈重信が朝野の有名人士を集めた送別会を開いている（1906年4月27日『読売新聞』）。また、大隈は鳥居龍蔵が帰国後に上梓した旅行記『蒙古旅行』（1910）に序をよせるなど鳥居夫妻のモンゴル行を全面的にバックアップしている（ちなみに第二序文は福島安正である）。

寺本の旅日記を見ると、寺本はクンブムに到着すると同時に大隈・福島宛に書簡をだしており、旅日記に記載のある寺本の日本宛書函は、福島安正と並んで大隈宛が多い。大隈宛書簡七通の中で寺本は、ダライラマに行った提言の内容、大陸における漢人ナショナリズムの勃興、光緒帝・西太后急逝の後の北京宮中の状況などを細かく報告している（石濱・和田 2020: 12-21）。

1906年5月、東洋婦人会が清国派遣女教員養成所を開設し、9月2日、同会を代表して清藤秋子と河原虎子が清朝の高官婦人に女子教育を勧めるべく北京に到着した。一行を迎え出たのは、服部宇之吉・繁子夫妻、川島浪速、木村芳子など肅親王家並びに下田歌子の関係者たちであった（加藤

斗規 2011: 57)。

(c) ハラチンからの極秘留学生

寺本と間を置かず大隈に送り出された鳥居龍蔵も、ハラチンに到着するや大隈に、ハラチンの5名の留学生候補（徳欽、恩和布林、諾們畢勒格、正月、特木各図）のプロフィールを送り、彼等が早稲田において日本語を習得したのち、それぞれの希望する医学・軍事の道を学ばせるように申し送っている。注目すべきは同書簡中において

…今回の留学は清国政府（露国にも）に対し最も秘密といたし居候へは、この辺充分御ふくみありてこの秘密をかたく御守り願上候…蒙古人は漢人と異なり居り、また互に相いれざる性質に候へば、漢人の教育と別にせられんことを祈り申候…

(1906 (明治39) 年11月7日付鳥居龍造大隈重信宛書簡⁽¹¹⁾)

と、彼等の渡日を「漢人」に対して極秘にするように念押ししていることである。ハラチンのモンゴル人に軍事教育をし、軍医を育てるということは、清朝の羈絆から脱しようとしているモンゴル人を支援することに繋がるため、清朝の疑念をかうことを懸念してであろう。

鳥居が到着と同時にこの5人を送り込んでいること、同書簡中で「小生当地にあらんかぎり、国家のため出来得べきだけ蒙古より本邦に向て留学生を派遣せしめん考にて、其留学の場所は貴校（現早稲田大学）の最もよろしきことを信じ候」とできるだけ多くのモンゴル人を早稲田大学に送ろうと宣言していることから鑑みて、鳥居は離日前に大隈よりモンゴル留学生派遣についての協力を頼まれていたと考えるのが自然であろう。

同書簡の最後で鳥居は同年1月に来日したパルタについて「其周旋し居る人其他に於てあまり好ましく無之候へばこの辺よく御ふくみ置被下度候」と述べており（この周旋人は、おそらくは佐々木照山を指している）、パルタが大隈の監督下に入ったのはこの鳥居の情報に基づいてのことかもしれない。

翌1907 (明治40) 年に帰国した鳥居龍蔵は7月10日付けで、前述したハラチンの詳細な情報を外務省に提出した。本稿中では随所にモンゴル人であるグンサンノルブのモンゴル・ナショナリズムが強調されており、それ

は清朝からの自立を意味するものであったため、満洲人である王妃（肅親王の妹）にも秘密にされていたという。たとえば近代教育に関する王と王妃の見解の違いは以下のように記されている。

…王は飽く迄蒙古主義を標榜し現時蒙古は清廷に征服せられ居るものなるが他日は必ず蒙古人自立の日なかる可らすと信し其経営せる兵事に教育に皆以て他日の地を成さんとの意に出ずるものなり、之に反して王妃の意見は唯、一般人智の開發するか為に教育を施さんとするに過ぎず…

（鳥居龍造（1907）「喀喇沁付近ノ現況」⁽¹²⁾）

つまりモンゴル人のグンサンノルブ王にとって、近代教育とはいずれモンゴル人が満洲人から自立するための準備であったが、肅親王の妹である満洲人の王妃にとっては、純粹に「人智の開發」すなわち啓蒙であった。また、グンサンノルブはモンゴルの自立について語る時はモンゴル語を用いて、満洲人の王妃に知られないようにしていたと以下のように記している。

…王は屢々學生に向つて之を漏すことあり或は蒙語の唱歌を作りて此意を歌はしむるに至る、独り王妃に至りては蒙語に通せず随つて毫も此事あるを知らざるか如し…

（同上：65）

このように民族を異にする夫婦は「意見の衝突を見ること少なからず」（同上：64）であったため、肅親王妃を始めとする満洲皇族の反感をかかわないためにも、日本側は5人の学生の来日の真の目的は秘せざるを得なかったのであろう。清王朝が崩壊した後は満洲人と内モンゴル王公は協調する場面もでてくるものの、1905年時点ではまだモンゴルの自立願望は妻にすら公言できないものだったのである。

つまり、福島安正・川島浪速を始めとする参謀本部の大陸人脈が、肅親王・グンサンノルブ王を介してモンゴル人の王公・子弟の留学生候補を選定し、それを「賓客」として日本で受け入れる側の「顔」が、民間外交官として知られた大隈重信と女子教育の一人者下田歌子の二人であった。ジャーナリスト石川半山によると、親王は大隈重信を「老師」と呼び、そ

の二人の息子を早稲田に留学させるなど緊密な関係が存在した。また下田歌子と肅親王の親密な交際についても証言し、以下のようにまとめている。

…下田女史も大隈伯と同じく王と面識はないが、頗る親密なる関係が有て、我輩の如きも東京と北京とを往復する間、幾度も女史と王との間に音信を取り次いだ者だ、日本の男子中の最大人物と、日本の婦人中の最大人物が、此の如く親密なる交際を訂した者は支那大陸に英雄豪傑多しと雖も、蓋し肅親王に及ぶ者は有るまい、而して凡そ北京に來りし所の日本の貴顕紳士で、肅親王に謁見せざる者はなく、謁見を得たる所の者で其の人物に敬服しない者はいなかった…

(石川安次郎 (1916) 『肅親王』: 165-166)

寺本、鳥居夫妻が前後して大陸にわたった1906年7月、早稲田は師範の養成のために清国留学生部 (-1910) を特設し (高木2015: 37)、7月23日、実践女学校も清国留学生の教育施設である分教場の設置願いを申請した⁽¹³⁾。大隈と下田が同月に清国留学生の組織的な受け入れを開始した事にも両者の協働性が見て取れる。

次に、チベットからの「視察員」または「留学生」来日がなぜ遅延したかについて考察したい。

4. 参謀本部が遂行したチベット「留学生」招致計画

ハラチン・モンゴルからの「留学生」が参謀本部や肅親王とその妹婿グンサンノルブ王の協力によって1906年に実現したことは対照的に、チベットからの「留学生」招致はなかなか実現にいたらなかった。この過程については参謀本部の視点から澤田 (2018: 273-258) が詳細を検討しているためここでは述べない。ここではチベット側の視点も加えて、ダライラマの来日計画や「留学生」計画がなぜ進捗しなかったのかについて考察してみたい。

(a) ダライラマの寺本に対する無関心

先行研究が明らかにしているように1898年にラサに潜入するために大陸にわたった寺本婉雅は、当初は組織的なバックアップがないまま、ただ宗

教的な情熱に突き動かされて動いていた（和田 2019b: 220–224）。1907年8月3日に寺本はそれまでの道程を次のように回想している。

…学資は東本願寺より支給さるるにも非ず、又官途より研究費として支給を受くるにも非ず、只我が目的が西藏研究にありて前後十年の星霜を送り曩には西藏探見を遂行し得て稍々我名声の多少世上に紹介せられ、我胆力の常人に比して強大、耐忍力の甚だ強執なるものあるを認められし結果、福島中将我志と東亜問題の刻下一日も等閑ならざる事情あるとを見てより、聊か資金を支給しくれらるるまでなり…

（『蔵蒙旅日記』: 240）

寺本がダライラマと初対面する直前にチベット仏教についてどのような考え方をもっていたかは、1906年9月28日の親鸞聖人の命日の日記の記述によって知ることができる⁽¹⁴⁾。この日、寺本は真宗の教義とダライラマの宗派であるゲルク派の教義を比較して、真宗の祖師親鸞が「肉食・妻帯を標榜し…末法相應の念仏宗を開き」、旧勢力を一掃したように、ゲルク派の祖師「宗喀巴（ツォンカバ）は戒律的比丘派を標榜し」、旧勢力を一掃したと対置させ、「宗喀巴は釈迦の教法を奉ぜしなれども、未だ其心髓を發揮するに至らず。仏教の中途に彷徨せるものと云ふべし。」と、ゲルク派の教えを真宗の下に位置づけている（『蔵蒙旅日記』: 208）。

また、10月26日の「達頼喇嘛に謁見して、日本仏教の盛大なるを説き、日本帝国、強大なる威光を達頼の頭上に蒙らしめんと欲するなり。」（同上: 214）や、11月8日の「蔵蒙無知の民をして我日本の威光と仏教の隆盛とを彼等に紹介せん為め当地に來りしより、種々の手段を施して布教傳導の策を廻らし、或は贈品をなし、或は説話をなし、東亜仏教徒の連絡を開くべき端緒を得んと尽力しぬ。」（同上: 219）との記述からは、寺本が日本の威光がチベットを圧倒することを信じて疑っていなかった様子が見て取れる。

しかし、11月22日、ダライラマとの謁見が実際に行われた後に日記は中断し、年が明けた1907（明治40）年の2月13日の記述まで無音である。再開した日記も東西仏教の提携という口癖は消え、代わって、西藏主権問題などの時局の話やダライラマの側近に対する不満が多く見られるようになる。

ここで改めてクンプム滞在中の寺本とダライラマの個別の会見について記した記事を洗うと、ダライラマと初対面したこの1906年の11月22日の謁

見と、クンブムから一時帰国する際に告別のために行われた1907年11月24日の謁見の二回しかないことに気づく。しかし、1907年11月20日の大隈重信宛書簡では「達頼と小生との交通は日を逐ふて誼厚を加へ候昨冬達頼此地に来錫致候時より自から謁見十数回に及び」とあるため（『大隈重信関係文書』7: 397-398）、日記の謁見記述の僅少さと齟齬する。

ダライラマとの初対面後何が起きていたのかは、後年寺本が行った1908（明治41）年10月28日付外務省への報告書の以下の記述から伺い知れる。

…一昨年以来達頼が青海の涯り安土⁽¹⁵⁾「クンブン（クンブム）」寺に駐錫せし頃、愚生は彼に接近し西藏改革と喇嘛教刷新策に関して屢々意見を陳し其枢要なる幕僚に面晤して説く所ありたりき。就中堪布の諸多ある中或怒りて絶拒する者あり或怒りながら耳朶を傾くる者あり…
（寺本婉雅（1908）「我国に西藏留学生派遣申込」⁽¹⁶⁾: 301）

ケンポ（漢語表記：堪布）とはチベット語の mkhan po の音写であり、僧院長、戒師など様々な意味があるが、寺本の日記にでてくる堪布はダライラマの宮廷（nang ma）に侍る側近の僧侶たちを指しており（gling dbon padma skal bzang 2011: 19）、ここでいう「枢要なる幕僚」と同じ意味である。つまり寺本の上申は当初ダライラマの側近（堪布）たちを怒らせたのであり、ケンポたちがなぜ怒ったのかは、前述した謁見直前の寺本の仏教観を思いおこせば容易に想像がつく。

ケンポたちの視点に立ってみよう。ゲルク派の宗祖ツォンカパは、仏教の中の諸思想を包括的に論じて体系化し、それをどのような順番で修習すれば最終的に仏にいたるかの道順（道次第）を示した。つまりゲルク派の教義には仏教哲学のあらゆる側面・あらゆる修行法が包括的に説かれているため、その完成度の高さと普遍性から他宗派を圧倒し、モンゴル人や満洲皇室の宗教へと発展したのである。ゲルク派の僧は僧院に属し戒律を護持し、終生仏教の研究と実践に励むが、真宗の僧は在家で妻帯・肉食を認め、修行を否定するので両者は対極といってよい。

ダライラマは滞在する先々の僧院で戒律復興を行い、論理学道場に立って仏教学の研鑽に励むべき手本を示していた。つまり、仏教の修行を否定し妻帯する日本人僧にダライラマが良い印象を持つはずもないのである。寺本はダライラマがロシアに信頼を寄せることを非難するが、ロシアのチ

ベット仏教徒であるブリヤート人たちは旅の途上にあるダライラマの護衛や接待をかってでるなど忠実に動いたため、ダライラマの信頼をかち得たのであり（和田 2018, 2019a）、同じチベット仏教徒の高僧でも妻帯・飲酒していたジェブツンダンパ8世や武装したアキャ・フトクトなどの破戒僧とは対立している（石濱 2018）。ましてチベット仏教徒でもない在家僧の寺本が西藏仏教の「覚醒」をいくら説いても、ダライラマの心に響くはずもない。寺本が日記に記していたようにチベット仏教を真宗の下に位置づけるような態度でダライラマの謁見に臨んだとするならば、側近たちが怒るのも当然であり、それ以後ダライラマに近づくことがかなわなくなったため日記の記述が途絶したと思われる。

では、寺本が大隈書簡中に述べた十数回の謁見とは何を指すのであろうか。寺本が何度も訪問し、留学生問題を話し合った相手、東本願寺法主の書簡を寺本にかわってダライラマに奉呈し、また、ダライラマから本願寺法主への返信を寺本に受け渡した人物は、ダライラマの側近の一人であるドゥルワ＝ケンポである。つまり、寺本の主張する十数回のダライラマとの謁見とはこの側近ドゥルワを仲立ちにしたやりとりを指している可能性が高い。ドゥルワ＝ケンポについては（c）で後述する。

ダライラマの姿をただ見るだけであれば、灌頂などの大人数の参加を前提とした法要に参加すればよい。しかし、ダライラマに個別に面会しようとする、相手はチベット仏教界最高位の高僧である。何万人もの巡礼がおしよせている状況下では誰にでも容易にその機会が与えられるわけではない。ダライラマ伝には、ダライラマの下に訪れた要人の、到着の挨拶（‘byor phyag）と出発の挨拶（thon phyag）が記録されており、寺本の旅日記に残る二回の謁見記録は丁度この到着の挨拶と辞去の挨拶にあたるが、同伝に寺本にあたる僧の記述はない。

寺本がダライラマと親密でなかったことは1908年10月28日、寺本がダライラマの直弟子になることを外務省に申し出た時の記録からも裏付けられる。本文書の中で寺本は直弟子になれば「常に如何なる処にあるも或還蔵して拉薩に至るも自由に達頼の前に出入し自己の意見を随意に吐露し得る身分となり得るなり」と記しているため、逆にいえば1908年の末にいたっても寺本はドルジエフなどのブリヤート人のようにダライラマの側近くに自由に入出入りできていなかったことを示している⁽¹⁷⁾。

寺本がダライラマと直接対面する機会が殆ど無かったという前提で寺本

の報告内容を見直すと、ダライラマが日本に人を派遣したい、また、観光したいと考えている、という記事は、みなダライラマの意志を寺本が推測した表現であることに気づく⁽¹⁸⁾。

現行の旅日記には大日本国東本願寺法主遣布教使寺本婉雅名義で1906年12月15日付の「達頼喇嘛贈呈文原稿」が収録されているものの（『蔵蒙旅日記』: 301-304）、これに関連した記述も現行の旅日記には見いだせない。寺本のダライラマに対する懐柔策にどれだけの実があったかは再検討が必要である。

(b) ダライラマ書簡にみる日本仏教の軽視

ダライラマ宮廷が寺本及び日本仏教を軽視していたことは、ダライラマが東本願寺の法主宛に書いた書簡が、臣下に宛てた書式をとっていることから明らかである。チベットにおいては目下から目上、あるいは同等のものに対してだす書簡は冒頭で「受信者 B の御前に、発信者 A が申し上げる」、と相手の名前を先に記して敬意を表すが、目上から目下に出す場合は、「発信者 A の書（勅） 受信者 B に告ぐ」、と自分の名を前にだす（石濱2001: 171-173）。これを踏まえた上で、日本とダライラマとのあいだで交わされた書簡をみると興味深いことが分かる。

1907年9月15日、東本願寺法主大谷光瑩からダライラマに宛てた親書が、ドゥルワ＝ケンボを介して奉呈された。東本願寺の教学部の回状では寺本に直接ダライラマに奉呈せよとあるので、ドゥルワを介している時点で寺本がダライラマに直接会見できる立場になかったことのもう一つの裏付けになる。この法主の親書は邦文でしたためられていたため、差し戻されて寺本がチベット訳を監修することとなった。この親書は元々

大日本国大法主特に書を
達頼喇嘛台下に呈す

という書き出しから始まっており、チベットの書面文化における目上から目下に宛てる形式になっていた。そこで当然、「原文よりも余程丁寧尊敬的に繙訳され」、翻訳が終わると直ちにダライラマに奉呈された。この書簡に対するダライラマの返信は以下のようである⁽¹⁹⁾。

釈教の総主 達頼喇嘛ノ書
広大なる知識を有する大日本国
大法主台下 ニ 捧呈候

ここでダライラマは発信者である自分の名前を先にだし、自称も仏教（釈教）の主人と尊大に表現している。法主号を抬頭しているが、寺本の訳語なので原文も抬頭されていたかは疑問である。この書式は前述した臣下へ宛てる勅書の特徴を備えており、ダライラマが日本仏教を評価していなかった証拠となる。ちなみに、その内容も日本に才幹あるものを派遣したいが、適当なる方法がないのでチベットに帰った後に行く、という実質ゼロ回答であった⁽²⁰⁾。

この後、1908年に五台山に滞在するダライラマに対して、4月20日付で、福島安正が、4月21日付で東本願寺法主大谷光瑩が書を献じているが、いずれも寺本が草稿を作っているためチベットの目上、あるいは同等の貴人にだす書式になっている（『蔵蒙旅日記』: 269-271）。一方、これに対するダライラマの返書は福島・法主いずれ対しても家臣に宛てる書式で記されている（『蔵蒙旅日記』: 274）。

（c）寺本を支援したハラチン人側近

本項では、寺本の意志をダライラマに伝えていたダライラマの側近ドゥルワ＝ケンポ（ドルワ堪布）について考察する。

ドゥルワ＝ケンポ（‘dul ba mkhan po）は漢名を謝庭華といい、1908年6月1日付の寺本の日記によると、彼はデブン大僧院の五人の教頭の一人であった（『蔵蒙旅日記』: 266）。寺本がダライラマとともに北京に滞在していた時期に外務省に提出した「北京駐錫達頼喇嘛隨從官と其策謀者」（1908年10月25日付）と題する報告書によると、ダライラマの二大側近は侍医であるラメン堪布（lha sman mkhan po）とブリヤート人側近ドルジエフ（ngag dbang mkhan po ガーワン堪布）であり、それ以外に「列国使臣に交渉せる堪布」という項目の筆頭に、ドゥルワ・チュージュー（謝堪布）の名前を挙げ以下のようにそのプロフィールを記している。

一、謝堪布（一名ドゥルワ堪布、蒙古喀喇沁旗下の人）（中略）

ドゥルワ堪布一名謝堪布は清朝党にして総て喀喇沁王の下命に依て動くものなるも拉薩レブン大学⁽²¹⁾の教頭として重要な位置にあり朝見のとき彼は達頼の訳官となり支那語にて上奏せり 然れん今や彼は秘密の相談には毫も預かるの権なし。只達頼の命令を奉る而已…

(寺本婉雅(1908)「北京駐錫達賴喇嘛從官ト其策謀者」⁽²²⁾)

注目すべきは下線部の、ドゥルワがハラチン(喀喇沁)出身であり、ハラチン王即ちグンサンノルブの命令に従っていたという部分である。これではなぜドゥルワが日本人寺本のために動いたのかという謎がとける。

チベットの大僧院(dgon pa)はいくつかの学堂(grwa tshang)を下部組織にもち、その学堂は地域や民族集団によって区分された無数の寮(khams tshan / mi tshan)から構成されている。地方からラサの僧院に修学にきた僧は出身によりどの地域寮に入るのが自ずと決まり、入寮すると同郷の人脈に助けられつつ、同郷の年配の僧に師事して勉学する。学成って仏教博士(ゲシェ)の学位を取得した後は、密教の修行に入るもの、故郷に戻って後進の指導にあたるもの、中央の僧院にとどまって出世を目指すなどの道歩む。地方に戻った僧がまた中央に見習い僧を送り込むため、中央の僧院と地方の間関係は途切れることはない。モンゴル出身の僧が入る寮はとくにデブン大僧院のゴマン学堂に集中していた(石濱 2001: 106-127)。

つまり、ドゥルワはダライラマに仕えつつも、デブン大僧院の地域寮を通じて故郷ともつながっており、おそらくは故郷からの情報をもとに寺本を支援したため、それを寺本が「ハラチン王の下命にて動く」と表現したものと思われる。ちなみに、ブリヤート側近のドルジエフもやはりロシア治下のブリヤート人としてダライラマの利益になるようにロシア皇帝とダライラマの間を繋ぐ努力を続けていた。しかし、寺本が旅日記や参謀本部に対する報告書の中で認めているように、近侍たちも衆僧もダライラマに服従しており、ダライラマの意思に反してまで、「操作する」という空気感にはなかった。ドゥルワもダライラマの益になると思った時のみ、寺本の工作に協力していたというのが真実に近いと思われる。

前述したようにダライラマとの個人謁見は非常に高いハードルがある。近侍のケンポたちを介してのやりとりが大半となり、その内容次第ではダライラマに取り次ぎすらされない。旅日記に基づくと、ドゥルワ=ケンポが寺本の支援を行き始めるのは1907年5月を期としている。寺本は5月13日(『蔵蒙旅日記』: 232)、5月18日、5月23日と頻りにドゥルワを訪問し(同上: 232-233)、5月23日の条には寺本がドゥルワにチベット仏教開刷について説諭すると、「堪布は予の説意を了として我国に使節を派し、東本願

寺と親交の誼を結ばんことを希望し居るなり」と云ったという（同上: 230）。5月30日にも寺本はドゥルワを訪問し、「達頼の日本派遣に付て協議するところありたり」している（同上: 236）。

なぜこの時期からドゥルワが寺本の支援を行い始めたかについてはドゥルワ側の記録がないため詳細は不明であるが、一つの可能性として、翌月（6月）24日ダライラマが北京に派遣した二人の側近（堪布）のために、寺本が日本公使館に紹介状を書いたことが関係しているかもしれない。

本紹介状には「日本の政治宗教軍事等を観察せしめ、進んで日本に留学生を派遣せしめ度きに付き、その結縁の徴として聊か方物を〔公使に〕贈呈致度旨」とダライラマから依頼された、と寺本はしたためているが、ダライラマが日本公使館と連絡をとる理由は「留学生」問題ではなく、ダライラマにとってより差し迫っていたチベットの主権問題に日本公使の口添えをもらうためであったことは、続く書中において「尤も達頼が日本の後援に拠て達頼の体面を維持し、西藏開善策を講ぜんとの交渉問題の内容に付ては別に詳細なる事情をご報告」とあることから明らかである（同上: 236-237）。つまり、ダライラマはチベットの主権を取り戻すべく日本公使館の後援を必要と考え、そのためケンポたちが寺本に近づいた可能性がある。

この後、7月14日、アキャ・フトクトとダライラマの対立を終わらせるために、アキャのダライラマに対する謝罪謁見を、寺本はドゥルワを介してダライラマに申し入れている（同上: 238）。9月には前述した東本願寺法主とダライラマの間の書簡のやりとりもドゥルワを介して行い、11月8日に再びドゥルワを訪れダライラマに方物献上の取り次ぎを頼んでいる（同上: 244）。

ダライラマの側近が急に寺本に協力的になった背景に、ダライラマが北京参朝という事態に及んだ時に、チベットの主権をダライラマに戻すよう日本公使館の口添えを得るためであったことについては、寺本も気づいていた。日本に一時帰国する際、ダライラマの二大側近のうちの一人ラメン＝ケンポ（ラマン堪布）が突然愛想良くなったことに対し、寺本は以下のように述べていることから明らかである。

…露党（ダライラマ宮廷の親ロシア派閥）の首領ラマン堪布は予の〔クンブムからの〕出発に際して好意を表れ来れり。其下心や達頼をして五台山より北京に参朝せしめんとするとき、予及日本政府に助援を依

頼せんと欲する前提なりと見るも誤りなきなり…

(『蔵蒙旅日記』: 247)

ダライラマは1908年3月10日に山西省にある仏教の聖地五台山に移駐し、そこでブリヤート人に布施された僧院を落慶し、チベットから呼び寄せた高僧たちとともに論理学のエキシビジョン・ディベートを行ったりしつつ、国際情勢を観望していた。

6月1日、一時帰国していた寺本が五台山に現れ、同日ドゥルワに東本願寺法主からの贈答品と親書、福島中将からの贈答品と信翰をダライラマに捧呈する取り次ぎを頼み、翌日ダライラマとの謁見に成功した(同上: 266-267)。寺本は6月6日にもダライラマが北京に参朝した後日本観光をするように勧めるようにドゥルワに頼んでいる(同上: 273)。

8月1日には西本願寺法主代理の大谷尊由とダライラマの著名な会見が行われ⁽²³⁾、この会見の席にもドゥルワは臨席している。寺本の主張ではこの後ダライラマも高僧の日本派遣に乗り気になったというが、西本願寺も参謀本部も来日のための費用を負担できなかったため、結果として留学生派遣の件は延期された。

このあと、ダライラマはチベットの主権問題を解決すべく9月28日に北京入りし、寺本も北京に移動しドゥルワを介して北京の北の城門外にある黄寺に滞在するダライラマと頻繁にやりとりをしている。

最後に、ドゥルワ＝ケンポはなぜ前述したようにダライラマの秘密の相談にあずかれない身分におちたのかを確認したい。その前年、1907年11月24日寺本がクンプムから一時帰国する際、寺本はダライラマに以下のよう

…猥下五台山巡錫の上更に北京に参朝の意あらば這般の手段を運らすに於て或は北京政府の困難ある場合に予及我日本官憲は聊かその際微力を尽して参朝の目的を達せらるる様思慮なきに非ず…

(『蔵蒙旅日記』: 247)

北京にダライラマが参朝した場合、ダライラマの目的を達成するために日本の官憲が動くことと請け合っていたのである。しかし、ダライラマが8月3日に北京に至り、清朝皇帝に謁見する際のプロトコールがダライラマ5世

の時代に比べて著しく低いことを日本公使館に申し立てても、寺本も日本公使館もダライラマに清朝の傘下にとどまるように説得し続けた。つまり寺本は約束を果たさなかつたのである。

日本に対するダライラマの期待の低下は日本とダライラマの架け橋となっていたドルワの評価にも直結し、それが10月25日の寺本報告にみられるドルワの「然れ^レ旺今や彼は秘密の相談には毫も預かるの権なし。只達頼の命令を奉る而已」という状態を生んだと思われる。

(d) チベット「留学生」招致に関する日本側の考え

「留学生」招致に関して寺本がどのような考えをもっていたかは1908年10月28日付けの外務省への以下の報告文書から読み取れる。

留学生交換問題の実行又日英或日清の聯絡を厚密ならしむる一の楔機^(ママ)としては此西藏問題は好都合の事件ならん即ち之を尤も径捷に実行し得る路は即ち達頼の枢機を掌る西藏人の渡来を勧むるにある而已英を悪み清に離れ露に親まんとする達頼の心事を一変して以て東亜の平和の一資に供し得へきものは達頼との連絡を結び置きて一面は清の為に謀り時には英の為に通しやりて日英同盟の深厚を増し以て露と清と將に接近せんとする疎溝を作り尚近き将来に日本の発展せんとする対滿の北辺に應用し内蒙古に於て生籬を作り露の南下を阻攔するの方便に供するを得は幸ならんか…

(寺本婉雅 (1908)「達頼ノ枢要ナル幕僚ヲ渡来セシムル件」⁽²⁴⁾)

要約すると、イギリスを憎悪し清から離れロシアに向かうダライラマの心を変えるには、ダライラマの側近を来日させることが早道である。ダライラマとの連絡を緊密にすれば、イギリスや清のために謀ることもでき、清とロシアの間に溝をつくることができる。日本がこれから「発展」していこうとする北辺に應用すれば内モンゴルにロシアの南下を防ぐ防波堤をつくることができる、というものである。

注目すべきは、チベット仏教世界がチベットからモンゴル、遠くロシアのブリヤートまで広がっていることを前提とした上で、日本にとって重要なモンゴル地域を日本側につけるためにダライラマ工作が必要であるとの論法を用いていることである。また、寺本がいう留学生は「学生」という

イメージとはほど遠いチベットを日本に親しませるための橋渡しとなるべき「賓客」であり、さらに、「イギリスや清のために謀る」という同盟国や国益のための手段であったことである。この寺本の思考法はロシアと主体的に関わることによって、清の影響下から離脱しようとしているダライラマの意志とは、かなりずれていることは言うまでも無い。

この報告書に対して北京公使の伊集院彦吉がどのような意見をもっていたかは、12月26日付外務大臣小村寿太郎宛機密149号文書「達頼喇嘛ニ関スル件」から知ることができる⁽²⁵⁾。

同文書によると、寺本を介してダライラマとの関係を構築するという計画は福島安正が発案して西本願寺とうちあわせて行ったもので、公使館は「補助」の立場であったといい、しかし、ダライラマとの関係構築によって得た情報によってイギリスや清に便宜をはかるという寺本の主張は伊集院も大筋なぞっている。これに続いて、伊集院は西本願寺と参謀本部の資金不足により留学生計画が延期されたこと、しかし、ダライラマとの関係はいつ再起動しても大丈夫な形に繋いであることを小村に報告している。

この文書の中で伊集院は、「寺本の人物固より完全とは申し難く候」と寺本という人物はいただけのないものの、経験豊富で語学に堪能であること、ダライラマの宮廷に知人が多いこと、また「将来邦人が西藏に入らんと試むるには宗教上に名を求むるの外途なく従って此方面に於ては矢張本願寺の事業に属すること最も穩当と認められ候」と僧侶であることを理由に、寺本を運用することを不承不承認めている。これはダライラマ工作が本願寺系の僧侶によって行われてきた理由を政府側の人間が述べたものとして興味深い。

この発言の背景にはその二ヶ月前の8月に結ばれた英露協商第二条前段において、清国がチベットの宗主国と定められたため、日本は清を介さずに直接ダライラマと接触できなくなったこと、しかし、同条後段においてチベット仏教徒の往来は認められていたことから(和田 2019a: 72-73)、僧侶によるダライラマへのアプローチが外交上もっとも摩擦が少ないと判断された結果であると思われる。

この時順延されたチベットからの「留学生」受け入れは、同じく僧侶である西本願寺の青木文教が引き継ぎ、1911年5月ダライラマの「枢要なる側近」ツァワ＝ティトゥル (tsha ba khri sprul) が青木に伴われインドから三人の侍従僧とともに来日することによって実現した。ツァワ＝ティトゥ

ルの来日もハラチンからの留学生同様極秘裏に行われ、来日後は大谷光瑞の別荘二楽荘内に特設された「西藏僧正室」に滞在し、後にチベット入りをする多田等観らが一行の世話係を担当した（高本 2013: 65）。ツァワ＝ティトゥルについては先行研究があるのでここでは詳述しない。

5. 辛亥革命後のチベット・モンゴル「留学生」の行動

1911年10月10日、辛亥革命が勃発すると、10月30日にはハラチンの留学生たちは陸軍参謀本部第二部長宇都宮太郎大佐宅を訪問して「蒙古連邦を奨励」し、12月1日に外モンゴルのジェブツンダンパ8世がモンゴル独立を宣言すると、次々と帰国していった⁽²⁶⁾。翌1912（明治45）年2月に清朝皇帝が退位すると、川嶋浪速と福島安正を始めとする参謀本部がグンサンノルブらの唱えるモンゴル独立を支援しようとし、しかし日本政府の辛亥革命不介入の立場から中止に追い込まれた（中見 2013: 131-163）。

一方、ダライラマも1911年末から1912年初頭に来日中のツァワ＝ティトゥルに「蔵軍優勢、清軍敗衰、法王帰藏に決す。僧正に下命すべき重要事項あり。至急インドまで来たれ」と帰還を命じる電報をうち、翌1912年1月にはツァワ＝ティトゥルは青木とともにチベットに向け神戸を旅立った（青木 1967: 39, 高本 2013: 75-77）。

この年、チベット政府は複数のチャンネルを通じて日本にダライラマのチベット帰還に必要な支援を求めた。大谷光瑞の3月28日付け徳富蘇峰宛書簡においては、ダライラマから頻繁に連絡がきてチベット帰還のために日本に支援を求めていることが記されている（加藤斗規 2011: 259-260）。さらに、5月14日付カルカッタ柴田総領事代理から内田康哉外務大臣への機密文書では、チベット政府が独立のための武器購入を日本に求めてきたことが記されている。本文書によると、チベット政府はイギリスとロシアにも同様の申し出をしたところ、英露協商を理由に断られ、日本にシベリア鉄道を利用しての武器調達ができないかを打診してきたという。領事代理は国としてはできなくとも私企業を通したらできるのではないかなど対案をだしている（Kobayashi 2019: 60-62）。

つまり、ダライラマ政権もモンゴルのために具体的な支援を求めたグンサンノルブ同様、チベットの独立のために日本に武器供与を含めた具体的な支援を求めていたのである⁽²⁷⁾。

おわりに

1906年、トルグート部からパルタ王、ハラチン部から四人のモンゴル人女子「留学生」たちがはじめて日本の土を踏んだ。彼等は、福島安正・川島浪速を始めとする参謀本部の大陸人脈が、満洲皇室の肅親王を介して選り出した人々であり、かれらを「賓客」として日本で受け入れる側の「顔」であったのが、民間外交官として知られた大隈重信と女子教育の一人者下田歌子(実践女学校・帝国婦人会・東洋婦人会の創設者)の二人であった。

1906年から、この参謀本部と二大教育者のユニットはロシアに傾斜して自立しようとするチベットとモンゴルに同時に工作をかけ(前者は東本願寺の僧寺本婉雅、後者は人類学者鳥居龍蔵が担当した)、清朝に極秘で留学生の受け入れを画策し始める。

モンゴルのハラチンからの留学生はすぐに実現したが、チベットからの「留学生」受け入れは難航した。その理由の一つとしてチベット仏教は日本仏教に比して遙かに体系化・思想化が進んでいたにも拘わらず、寺本が日本仏教至上の立場からチベット仏教を見下す言動を行っていたことから、ダライラマに上申の機会さえ与えられなかったことが挙げられる。しかし、1910年にいたってチベット主権問題についての選択肢が狭まっていく中で日本との関係構築を考えるようになったダライラマは、ようやく高僧の日本派遣に応じた。日本側がダライラマやその側近の日本招聘を行った動機は、チベットと関係を構築することによって清やイギリスのためにチベットを動かす、という目論見があったが、ダライラマ側は清からチベットの主権をとり戻すための一助として日本との関係構築を考えていたため、両者の思惑は常にすれちがっていた。

そのため、1911年に辛亥革命がおき翌年2月に清朝が崩壊すると「留学生」たちは次々と帰国し、日本に「独立」のための具体的な支援を求めた。「東アジアで最初に近代化した」という矜持の下、日本主導のアジアの覚醒を期して日本の教育者たちは参謀本部と協力してチベットやモンゴルに教習を派遣し、また留学生を受け入れていたが、チベット・モンゴル側は自らの自立のために日本の支援を求めたのであり、それは必ずしも日本の利益と一致するものではなかったのである。

註

- (1) 1896（明治29）年、日清戦争の終結を受けて早稲田大学や実践女学校を始めとした日本の教育機関が清国人留学生の受け入れをはじめた。清国人留学生や日本から清国におくられた日本人教習については、教育史のみならず、日中関係史や政治史においてもすでに多くの先行研究が積み上げられてきた。近年のものを挙げると小島淑男（1989）『留日学生の辛亥革命』、大里浩秋・孫安石編（2002）『中国人日本留学史研究の現段階』、同（2009）『留学生派遣から見た近代日中関係史』、清朝統治下のイスラーム圏からの留学生については王柯（2006）「国家、民族とイスラーム：ムスリム国民誕生の政治文化」などがある。
- (2) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B03050317200: 361。小村がこの計画に当初賛成し、大隈が外務大臣の時に提議し、西が外務大臣に交代した時に決定した（Ref.B03050317100: 275）。成田安輝については木村肥佐生氏の一連の研究を参照。
- (3) 実際の創立者であった下田は顧問となり、会長には鍋島直大の夫人鍋島栄子が就任した（加藤恭子 2021: 180-181）。
- (4) 『下田歌子関係資料総目録』No.0733。
- (5) 成田も木村芳子も後に木村の弔辞を記すことになる実践女学校の副校長青木文造も鹿児島出身である。
- (6) 木村（1981: 40）によると、この年成田は安東県に居住し朝鮮平安北道朔所において金鉢を経営している。
- (7) 当時現地で情報収集を任務とする人々は外国人の耳目をそばだたせないように軍服ではなく支那服を着るよう勧告されていた（戸部 2016: 47）。
- (8) 以上木村芳子についての情報は、実践女学校校長青木文造が1911年に書いた木村芳子に対する弔辞によるものである（『下田歌子関係資料総目録』No.4298）。
- (9) 清朝ですらダライラマ13世の行方を見失っていた時期であり、寺本はおそらくダライラマのチベット脱出をもっとも早期に探知した外国人である。
- (10) JACAR Ref.B16080719400: 62。
- (11) 『大隈重信関係文書 8』: 85-87。
- (12) JACAR Ref.B16080719400: 64-65。
- (13) 「実践女学校支那留学生分教場日記」（『下田歌子関係資料目録』No.1888）。留学生に対する授業は赤坂の洋館を借り上げ、1905年7月に開始している（『下田歌子先生伝』: 403）。

- (14) 寺本は大陸にいる間も親鸞聖人の命日・誕生日には欠かさず法要を行っており、随所で真宗の信仰に対する情熱を吐露している。
- (15) 東北チベットを意味するアムド (a mdo) の漢音写。
- (16) 本資料は JACAR Ref.B03050601500 「清国ノ蒙古経営並ニ達頼喇嘛關係雜纂」(1-6-1-32) (外務省外交史料館) に含まれている。
- (17) JACAR Ref.B03050601500: 303。
- (18) 190612月5日付大隈重信宛書簡の「[ダライラマは] 日本へ観光致度念頻り動き居候へとも北京衙門の不許に依り無據滞錫致居候」や(『大隈重信関係文書7』: 396-397)、1907年5月26日にもダライラマの侍医ラメン=ケンボを訪れた際、「達頼及侍臣一般の志望は日本に人を派遣して宗教政治等を視察せしめたく希望しあるも、只達頼の信認を受けつつある侍医堪布のみ兎角意を決する能はざるに依て周囲に居る従臣は独断的に海外派遣の必要なる旨を達頼に上申せず、只に堪布の意向のみを伺ひつつあり」等の記事が例としてあげられる(『藏蒙旅日記』5月26日: 231)。
- (19) 本書簡の日付はチベット暦火の羊年8月23日であり、寺本が本書簡を受け取ったのが西暦1907年9月19日である。
- (20) 本文中で言及した東本願寺法主とダライラマの間で交換された親書は『藏蒙旅日記』(241-243) に収録されている。
- (21) ラサの三大僧院の一であるデブン大僧院 ('bras spungs)。
- (22) JACAR Ref.B03050601500: 295-296。
- (23) この会見については白須 2007が詳細に論じている。
- (24) JACAR Ref.B03050601500: 304-305。
- (25) JACAR Ref.B03050601500: 306-309。
- (26) 横田 2009: 168-170、中見 2013: 133-134参照。鳥居龍蔵がおくりこんだ五人のハラチンからの男子留学生の辛亥革命前後の行動については、田中 (2013) が近年詳細に明らかにした。
- (27) カルカッタに駐在する柴田総領事代理から内田康哉外務大臣に宛てた明治45年5月14日付け書簡に基づく (JACAR Ref.B03050601500: 313-316)。

【参考文献一覧】

・蔵文

gling dbon padma skal bzang (2011) *de snga'i bod sa gnas srid gzhung gi gzhung yig thog gi tha snyad spyod srol dang 'brel yod phyogs bsdus gsal 'grel*. 民族出版社.

• 邦文・英文

- 青木文教（1969）『西藏』芙蓉書房。
- 赤坂恒明（2019）「旧トルゴード東路右旗郡王パルタの明治天皇への謁見記録」『史滴』41: 2-24.
- 足立崇（2021）「日本統治時代最初の紅頭嶼調査で撮影された写真について」『大阪産業大学論集 自然科学編』131: 1-24.
- 石川安次郎（1916）『肅親王』警醒社書店。
- 石濱裕美子（2001）『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店。
- （2011）『清朝とチベット仏教』早稲田大学出版部。
- （2018）「ダライラマ13世によるモンゴル仏教界の綱紀肅正とその意義について」『桜文論叢』96: 193-216.
- （2019a）「20世紀初頭、チベットとモンゴルを結んだ二人のモンゴル王公——カンドー親王とクルルク貝子——」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』29: 33-46.
- （2019b）「大隈重信の東西文明調和論の背景にある19世紀末の普遍主義」『史滴』41: 242-224.
- 石濱裕美子・和田大知（2020）『図録：大隈重信とチベット・モンゴル』早稲田大学中央ユーラシア歴史・文化研究所。
- 石光真清（2018）『望郷の歌 新編・石光真清の手記（三）日露戦争』中公文庫。
- 一宮（河原）操子（1909）『蒙古土産』実業之日本社。
- 王珂（2006）『20世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会。
- 大里浩秋・孫安石編（2002）『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房。
- （2009）『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房。
- 岡本真希子（2018）「日清戦争期における清国語通訳官——陸軍における人材確保をめぐる政治過程——」『国際関係学研究』45: 27-39.
- 加藤恭子（2015）「20世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」『ジェンダー研究』18: 73-85.
- （2021）「明治末の日本人女史教員中国派遣と下田歌子」広井多鶴子編著『下田歌子と近代日本1854-1936』: 173-193, 勁草書房。
- 加藤斗規（2011）「辛亥革命期、清国留学生盛先覚と大谷光瑞の会談について——ダライラマ『帰藏』問題と『五族共和』論に関して——」白須浄眞編『大谷光瑞と国際政治社会』: 251-262, 勉誠出版。
- 川崎真美（2006）「清末における日本への留学生派遣——駐清公使矢野文雄の提案とそのゆくえ——」『中国研究月報』60-2: 3-16.

- 木村肥佐生（1981）「成田安輝西藏探検行経緯（上）外交資料に見る東チベット經由
入蔵挫折記」『アジア研究所紀要』8: 33-87.
- 高本康子（2010）『近代日本におけるチベット像の形成と展開』芙蓉出版.
- 小島淑男（1989）『留日学生の辛亥革命』青木書店.
- 故下田校長先生伝記編纂所（1943）『下田歌子先生伝』.
- 小林亮介（2019）「ダライラマの川島浪速宛書簡にみるチベット・日本関係——日露
戦争とチベット問題——」『史滴』41: 202-224.
- Kobayashi Ryosuke（2019）“The exile and diplomacy of the 13th Dalai Lama (1904-1912)”
The Resurgence of “Buddhist Government. Union Press: 37-68.
- 高本康子（2010）『近代日本におけるチベット像の形成と展開』芙蓉書房.
- （2013）『ラサ憧憬：青木文教とチベット』芙蓉書房.
- 高本康子・三宅伸一郎（2012）「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」『真宗総合研究
所研究紀要』31: 143-186.
- 澤田次郎（2018）「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作：一八九〇年代から
一九一〇年代を中心に（1）」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』40:
288-247.
- （2019）「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作：一八九〇年代から
一九一〇年代を中心に（2・完）」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』
41: 1-24.
- 実践女子大学図書館編（1980）『下田歌子関係資料総目録』.
- 白須浄真（2007）「1908年（明治41）年8月の清国五台山における会談とその波紋——
外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊——」『広島大学大学院
教育学研究科紀要 第二部』56: 55-64.
- （2011）「外務本省に提出された西藏問題に係わる一報告書 1912年2月13
日、西本願寺が提出した報告書の紹介とその解説」白須浄真編『大谷光瑞と国際
政治社会』: 263-297, 勉誠出版.
- 高木理久夫・森美由紀（2015）「早稲田の清国留学生——『早稲田大学中国留学生同
窓録』の記録から——」『早稲田大学図書館紀要』62: 36-104.
- 田中剛（2013）「モンゴル人留日学生と辛亥革命」日本孫文研究会編『グローバルヒ
ストリーの中の辛亥革命』: 77-92, 汲古書院.
- 谷壽夫（1966）『機密日露戦史』原書房.
- 寺本婉雅著・横地祥原編（1974）『蔵蒙旅日記』芙蓉書房.
- 戸部良一（2016）『日本陸軍と中国』ちくま学芸文庫.
- 鳥居きみ子（1906）『蒙古行』読売新聞社.

- 鳥居龍藏（1911）『蒙古旅行記』博文館。
- 中見立夫（2013）『「満蒙問題」の歴史的構図』東京大学出版会。
- 福島四郎（1935）『婦人界三十五年』不二出版（復刻版）。
- 横田素子（2003）「喀喇沁右旗札薩克貢桑諾爾布の学堂創設」『アジア民族造形学会誌』3: 27-35.
- （2005）「内蒙古喀喇沁右旗学堂生徒の日本留学」『アジア民族造形学会誌』5: 91-108.
- （2006）「土爾扈特王帕勒塔の渡日に関する一件」『中日文化研究所所報』5: 45-67.
- （2009）「1906年におけるモンゴル人学生の日本留学」『東西南北：和光大学総合文化研究所年報』2009年号: 155-172.
- 来城小隠（宮崎繁吉）（1906）「土爾扈特王と照山氏」『写真画報』（1）5: 9-11.
- 早稲田大学大学史資料センター編（2010; 2011）『大隈重信関係文書 7; 8』みすず書房。
- 早稲田大学大学史編集所編（1978）『早稲田大学百年史 1』早稲田大学出版部。
- 和田大知（2018）「一九〇四～一九〇六年の移動期におけるダライ・ラマ十三世の主体的外交について」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』26-2: 13-25.
- （2019a）「ダライ・ラマ十三世の移動期間（一九〇四～一九〇九）におけるブリヤート人との関係について」『史観』181: 63-85.
- （2019b）「寺本婉雅の対チベット活動とその人物像」『史滴』41: 225-203.
- （2021）「寺本婉雅『西藏蒙古旅行に於る報告』（1905年）翻刻」『九州大学東洋史論集』48: 1-56.